

2019年度教育研究活動報告用紙(様式9(2019))

氏名 溝部 昌子	職名 教授	学位 博士(保健学) 東京大学 2003年
----------	-------	-----------------------

研究分野	研究内容のキーワード
看護技術 高齢者看護 循環器疾患の看護 国際看護	看護技術、循環器看護、血管看護、老年看護学 異文化対応能力

研究課題
<ul style="list-style-type: none"> <li>・看護師が行う下肢血流障害の評価、深部静脈血栓症予防対策</li> <li>・看護基礎教育における血管看護技術教育</li> <li>・血管看護教育における教材開発</li> <li>・異なる文化的背景をもつ患者への看護ケア</li> <li>・外国につながる人々への看護におけるコミュニケーション</li> </ul>

担当授業科目
成人・老年看護学演習(前期) 老年看護学概論(前期) 総合看護学演習(前期) 総合看護学実習(通年) 看護研究の基礎(前期) 老年看護学方法論(後期) 国際保健論(後期) 老年看護学実習I(通年)

授業を行う上で工夫した事項(※ 助手については、実習・演習等の指導を行う上で工夫した事項)
<p>授業科目名【老年看護学概論】</p> <p>①今年度より、成人老年看護学概論から老年看護学概論が独立したこと、老年看護学方法論、老年看護学演習と続く科目での学習内容と主な方法を示した資料を配布し、学生が知識や技術の修得の計画や自己評価ができるようにした。老年看護の特徴について、高齢者を取り巻く状況、知識を第1回、第2回に集中して講義したうえで、高齢者のからだ、こころ、かかわり、暮らし、生きがいについて広く知り、様々な特徴ある高齢者を想起できるようにした。講義資料は、予め kaname 上で閲覧、ダウンロードできるようにし、予習復習に活用できるようにした。事前課題をもちより、クラス内で発表、ディスカッションする機会を合計3回設けた。</p> <p>②従来に比べ、老年看護学概論では、アセスメントや看護に直接必要な事柄ではなく、高齢者の豊かな生、生きがい、高齢者の生き方、サクセスフルエイジング、高齢者の意思決定、高齢者の意思決定、エンドオブライフケア、看護中範囲理論(スピリチュアリティ、レジリエンス、コンフォート、エンパワメント)等から構成し、概論の科目としては妥当で、充実した内容となった。</p> <p>③全体の評価平均点は76.5点、標準偏差7.3、尖度-0.29、歪度-0.19の正規性の高い分布となった。秀2名、優33名、良49名、可16名で、1名は再試験で合格となった。老年看護は、記憶する必要のある知識と、深く人間やその考えを理解したり、創造性を以て思考する能力が要求されるが、定期試験による知識の確認と、高齢者や環境を理解するために資料を収集しそれを基に論述する学習活動を通して、老年看護の基礎的知識や態度を修得できたと考える。</p>

④老年看護学概論、老年看護学方法論、老年看護学演習、老年看護学実習 I, II を総合して、高齢者看護について学ぶ体系を考慮しながら科目構成、内容、方法を検討している。内容の構成、資料などの教材の整備は、毎年学生の反応、達成度、臨地実習での成果をモニタリングしながら、老年看護学の科目全体と調整しながらすすめている。部分的に充実や改善が得られてきているので、総合的にも老年看護学教育の充実が進行していると考えられるが、その成果の示し方についても検討していく。

#### 授業科目名【総合看護学演習・実習】

①7人の学生を担当した。4月より総合看護実習のテーマに関する情報検索を開始し、5月には概ね総合看護実習の計画を策定し、7月末から8月にかけて総合看護学実習、9月実習報告書を完成した。テーマの選定や実習方法の具体的な計画は、学生の興味・関心に沿い、それぞれのペースで進め、それに応じた指導ができた。

介護老人保健施設伸寿苑2名、小倉リハビリテーション病院5名のテーマは、認知症高齢者に対する回想法、運動療法、塗り絵の効果、睡眠障害の原因別のケア、口腔ケアにおける看護師の役割、食事量アップのための看護ケア、脳梗塞患者の障害受容過程についてで、高齢者看護の今日的課題とそのケアの方法について実践的に学び、その成果について医療チームと共有することにつながったと思われる。

②受講者7人の平均点82.4点、最低77、最高87であった。実習課題に関する情報検索とその整理、実習計画立案、実習とその記録について、全ての学生が自律して取り組み、指導を受けてさらに修正、改善しようとする態度が見られた。臨地実習場所においては、それぞれが実習指導者や病棟師長、関連職種と連絡を取りながら日々の看護計画や実践を調整し、実践、報告している様子は、実習ラウンドで都度確認でき、実習生として望ましい行動がとれていた。最終的な成果物については、思考や踏み込んだ学習の不足が感じられる面があり、到達度としては概ね達成された水準と考える。

③学生はこの間、並行して就職活動にあたり、第1志望に内定した。それぞれの背景や、希望を言語化することを中心とした就職活動に関する指導を通して、情報収集や、自身の考えを整理して記述することが上達し、総合看護実習での実習計画の立案や、臨地実習先での調整を自律して進めることにつながった。

④就職活動や総合看護学実習の進捗はよかったが、国試対策への取り掛かりが遅かった印象があり、学習習慣の確立のために、4月から老年看護学演習への参加、定期的な国試対策問題集の勉強会を実施したい。総合実習の進行日程については、あまり急ぎすぎず、その時々学生にとって大切なことを優先できるように日程的計画に幅を持たせたい。また、自身が国家試験対策担当で、4年生全体の学習指導に注力していたが、2名が国家試験不合格となったため、担当学生個々に応じた細やかな指導をしたいと強く思う。

#### 授業科目名【看護研究の基礎】

①看護においては、実習、実践、教育いずれにおいても研究的思考や継続的な学修が必要であり、そのことは生業としての看護の価値を高めるものであるということを経験として授業構成を検討した。生活の中で活用されている研究的思考やデータ分析などの技術により、合理的でより効果的、効率的な暮らし、看護学、看護実践を発展させ、患者や人類の利益につながるという指向で、身近なものから臨床実務、看護科学的なものなど、様々な難易度と種類の研究論文を精読する機会を設けた。

本科目では、例年グループワークにより、研究テーマを定め、研究計画書作成、研究の実施、まとめ、発表を行っている。私は本年度から担当しているが、過去には他大学で担当したことがあった。本学3年生前期は、看護演習科目で課題を多く抱えている状況であることを鑑み、できるだけ授業時間中にグループワークによりデータ分析、論文作成ができる時間配分とした。実際には、各自が持ち帰り作業した日は何日かあったと思われる。研究テーマは学生自身が興味を持てるものを記載してもらい、希望調査を基に担当教員全体でグループわけ、担当教員配置を決定した。このため、学生は自身の興味に沿ったテーマで学修できた。

②本科目の評価配点は、課題 20 点とグループワーク 80 点であり、複数教員担当で、グループワークをするため、10 項目についての評価者、評価基準を講義のはじめに資料を配布し、詳細に説明した。グループワークの終了、発表終了、各教員評価終了後に、担当教員全員で評価を供覧し、点数調整を行った。特に、秀でていたグループについては、秀となるような基準として、概ね優という評価となった。平均点 85.3 点、中央値 85 点、秀 13 名、優 94 名、良 5 名で、グループ共通の点数が部分的に含まれ、全体に高く評価された。中には、グループの学修活動に積極的に参加していなかった者も含まれるという声は散見されたが、学生の学修実績や努力が反映されていないということはないと考える。

③研究プロセスを理解し、研究の実践を通して学ぶ事については、学生の積極性や器用さを感じられた。基礎教育ではあるが、リテラシーの高い学生も多いので、限界をこちらから設定するのではなく、興味への探求や、情報検索、試みなどを幅広く受け入れ、将来の看護や職業人としての生活の礎の要素にでもなるような、記憶に残る学修体験となるよう工夫したい。

#### 授業科目名【老年看護方法論】

①前期「老年看護学概論」で、高齢者の生きがいやサクセスフルエイジング、高齢者看護の理論について触れ、2 年間を通して学べる事例を提示し、継続的にそれを利用しながら後期「老年看護方法論」で技術的な側面を中心として展開し、知識の増加や学習の深まりを実感できるようにした。3 年生の看護過程の展開での学生の自己学習の負担を軽減でき、対象の理解や看護実践についての学習を促進し、臨地実習への準備状態が高まることを期待している。また、講義内容に関連した課題学習（栄養指導、褥瘡予防ケア、排泄自立支援、肺炎予防、聴覚障害、災害支援）を評価対象とし、優れたレポートを講義内で発表・紹介したことで、回数を重ねるごとに、提出物全体の質が向上した。

昨年度は定期試験で自作まとめの持ち込み可としたところ、今年度学生が当初から「持ち込み」を前提にして講義に参加している様子であったため、「持ち込み不可の記述式テスト」とし、10 月頃から通知した。結果的には、昨年度の持ち込み試験よりも得点が向上し、知識の定着が得られたと考える。

②本科目は、定期試験と提出課題とその他から総合的に評価され、平均点 88.3 点、標準偏差 0.7 最低 66 最高 99 であった。秀 46 名、優 39 名、良 9 名、可 3 名で不合格者はゼロであった。筆記試験だけについてみれば、平均点 87.5 点、最低 60、最高 100、持ち込み不可の記述式試験であったにもかかわらず、学生の学習は深くなされており、知識の定着がしっかり確認できた。

そもそも老年看護学に必要な知識は少なくなく、教科書に記載されていない新しい事実も多いため、提示している資料が多いことを考慮すると、学生はそれを修得するための努力は高く評価できるが、授業評価における自己評価の平均が 3.7～3.8 で高くない。

③高齢者看護技術は日進月歩であり、診療報酬制度で新たに保険収載されるものが常にあり、看護師として求められる知識、技術を常に up-to-date していく必要がある。これに応じた授業構成にするためには、既存の教科書では不足であり、現在の医療や国家試験問題、今後の高齢者を取り巻く環境をふまえてよく調整されていると考える。また、卒業後も自律して学びを継続できる基礎力の醸成に役立っていると考えられる。

④当初期待した以上に、学生は課題に熱心に取り組み、定期試験でも優れた成績を修めたことをフィードバックしたい。学生に期待することの水準を下げるのではなく、到達を支援できる方法を教員として継続的に工夫していきたい。方法論に用いていた 2 冊の教科書の内容に重複があるため、老年看護技術の教科書を変更し、さらに、様々な評価スケールが一覧できるハンドブックを新たに選定した。学習や実習を効率的に進められると考える。

#### 授業科目名【国際保健論】

①身近な話題から世界にも目を向けられるように、北九州市に暮らす外国人に関する情報、教員が行った海外での調査についての写真やデータ、テレビ番組や書籍で紹介されている様々な国や地域での暮らしや文化について紹介した。

「しおり 2018 異文化との出会い 42」外国につながる人々への看護の困りごとマップを教材とし、学生同士のディスカッションと、アンケートへの回答により、どのように対応したらよいかを自身の課題として整理した。また、将来看護師として外国につながる人々への看護に役立てられるように、「看護英語ノート」または「食文化ノート」をグループに分かれて制作した。

②学生が制作した「看護英語ノート」は、今後印刷して学生に配布する予定だが、将来にわたって、全く同じような状況ではなくても、文化背景の異なる患者と遭遇した時の対処についてヒントが得られると思われる。この作業の出発点に関わったこと、その作業を発展させると、教材が完成するという体験できたことはよかったと思われる。なお、実際に学生が作成した看護英語ノートは、十分な情報検索によらないものが多く、状況を理解するための情報、看護師としての説明（日本語）、説明（英語）の全てをこちらで改めて制作した。

③今年度より「国際看護」の教科書を用いた。情報が整理されており、効率的に知識を習得することが可能であったと思われる。また、ディスカッションやグループ学習活動を通して、異なる文化背景をもつ人々への対応について考える時間が多く持てたことはよかった。授業評価とは別に行ったアンケートでは、この学修をどう役立てるかについての記述が多くあり、成果があったと考える。統合科目としての国際看護をふまえ、国家試験出題基準にも対応できるようにしたい。

#### 授業科目名【老年看護学実習Ⅰ】

①昨年度は自身の病気療養のために管理できなかった実習があった。今年度は自身の科目（実習）への関わりを明確にするために、実習期間中、全ての学生に面談を行った。面談では、学生による症例のプレゼンテーションにより、病態の理解、専門的言語の活用、患者理解のための情報収集、看護問題の優先性の判断、患者の個別性を汲んだ看護目標、看護計画の立案、看護実践とその評価について、達成度を評価、記録し、領域教員との成績評価会議で共有した。また、学生の進路志望や学習課題について、一看護師として助言し、激励した。

②本年度は、科目責任者としてだけでなく、実習グループを担当したので、学内用務を調整しつつ、他の教員と協力を得て実習指導を行った。これによって、実習方法や指導上の課題が明らかになり、学内教育での改善点が見つかった。看護問題と病態について、関連図を作成し理解と表現を促すことは、2年生後期から既に取り入れた。併せてこの学年の臨地実習の際の実習方法、記録様式の一部を変更し次年度実習要綱を作成した。教科書の一部見直し、3年前期に看護過程に関する書籍を追加する。看護過程演習で、看護目標、看護計画の設定方法を具体的に演習する、健康知覚パターンで病態、治療、看護観察を詳細に記述するよう講義するなどである。

③本科目は進行中のため、最終評価ではないが、平均点は80点前後となる見込みである。各担当教員の評価表に従った評価、評価会議、前述の評価面談を基に実習担当者で調整しており、成績評価として妥当であると考えられる。また、実習到達度としても概ね満足できる。さらに、本年度は欠席者が少なくのべ10人未満であり、学生指導と自己管理がうまくいっているものと思われる。

#### 学 会 に お け る 活 動

所属学会等の名称	役職名等 (任期)	加入時期
日本血管外科学会	チーム医療推進委員会委員	2014年～現在に至る
日本血管看護研究会	代表世話人 研究会プログラム委員	2015年～現在に至る
日本リンパ浮腫治療学会	評議員	2016年～現在に至る
日本看護科学学会	編集委員会委員	1999年～現在に至る
日本看護管理学会		2003年～現在に至る

日本看護評価学会	学術委員会循環器看護ワーキンググループメンバー	2011年～現在に至る
日本循環器看護学会		2014年～現在に至る
日本看護理工学会		2016年～現在に至る

2019年度 研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
<b>【著書】</b> ナーシング・グラフィカ 「疾患と看護シリーズ」 『2循環器の疾患と看護』	共著	2020年1月	メディカ出版	下肢静脈瘤、深部静脈血栓症、肺塞栓症患者の看護、予防的ケアについて解説した。 B5版 総頁数:358頁 担当部分：p.311-312、p.314、p.315-317
<b>【学術論文】</b> 看護学生の老人福祉センターにおける老年看護学実習の学び	共著	2019年4月	インターナショナル Nursing Care Research 18巻1号	老年看護学実習記録の内容分析を基に、老人福祉センターでの実習成果を明らかにした。「老人福祉センターで学んだこと」に記載された内容には《老人福祉センターの役割・機能》、《利用者像》、《利用者にとっての老人福祉センターの意味》、《看護師の役割》、《老年観の変化》の5つがあった。老年看護学実習の対象の療養生活の場には、治療の場(病院)・療養生活の場(介護施設)・日常生活の場(在宅)があるが、なかでも老人福祉センターでは、活力ある元気高齢者の姿を捉える機会となっていると考えられた。 A4版総頁数:114頁、p97-106 著者：岩倉真由美、溝部昌子
看護学科における初年次教育の取り組み	共著	2020年3月	西南女学院大学紀要 Vol. 24	「初年次セミナー」では、1年生を対象に、スタディ・スキルの基本を学び強化を図った。さらに、看護専門職としてのキャリアデザイン・将来の進路への動機づけとなる内容を含めた。スタディ・スキルの修得には、スモールステップ法を用い、レポートは文字数と課題のレベルをあげていった。

2019年度 研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				<p>学生の到達度自己評価では90%以上のものが目標を達成した。また、図書館等の利用率も高かった。</p> <p>A4版総頁数:147頁、p11-21 高橋甲枝, 目野郁子, 新谷恭明, 前田由紀子, 一期崎直美, 笹月桃子, 溝部昌子, 吉原悦子, 財津倫子, 中原智美</p>
<p><b>【報告書】</b> 看護職の文化的能力の評価と能力開発・臨床応用に関する実証研究 コンテックス報告書</p> <p>外国につながるのある人たちへの看護コミュニケーションに関する研究 -「看護英語ノート」の制作-</p>	<p>共著</p> <p>共著</p>	<p>2020年3月</p> <p>2020年3月</p>	<p>看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター</p> <p>西南女学院大学保健福祉学部附属保健福祉学研究所2019報告書</p>	<p>医療の国際化、看護職の多文化対応能力養成のための研修を構築し、7月から2月にかけてベーシックコース、アドバンスコース、エキスパートコースを4回実施した。この内容と参加者アンケートを報告したもの。</p> <p>A4版 頁数:全140頁 著者: 野地有子、溝部昌子、近藤麻理、小寺さやか、野崎章子、相原綾子、炭谷大輔、米田 礼他 担当:p5-12、 p 53-92、 p98-99</p> <p>「しおり2018外国につながるのある人たちへの看護ケア」より15場面を抜粋した。遭遇した看護師が状況を理解するために必要な情報について資料を収集し整理した。看護師として最低限必要と思われる説明を作成した。日本語説明を基に英文を作成した。英語を母国語とし、看護英語教育を専門とする英語教員が担当した。医療イラストの実績のある印刷所にレイアウト・イラストを依頼し、B6版24頁の小冊子となった。</p> <p>A4版 頁数:全頁 著者: 溝部 昌子、野地 有子、藤田 比左子、Mathew Lee Porter、近藤 麻理、小寺 さやか、飯島 佐知子</p>

2019年度 研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
<p>【学会発表】</p> <p>The current situation and problems of nursing care in hospitals caring for international patients in Japan- To make a policy recommendation from the viewpoint of nursing administraiotn</p>	共著	2019年6月	ICN Congress 2019 (Singapore)	<p>看護師・看護管理者により実施したフォーカスグループディスカッションで外国人患者受け入れに対する課題をまとめたもの。言語的障壁については種々のツールを用いて克服できる部分があるが、それ以外の文化の違いにどう対応するかが課題であり、看護師の文化能力を高める必要がある。</p> <p>Ariko Noji, Akiko Nosaki, Mari Kondo, Sachiko Iijima, Sayaka Kotera, <u>Akiko Mizobe</u></p>
<p>循環器看護とは何かを考える-グローバルスタンダードと日本の医療動向を見据えて-</p>	共著	2019年11月	第16回日本循環器看護学会学術集会 (於 東京)	<p>日本循環器看護学会学術委員会、循環器看護の定義及びステイトメント作成にかかわるワーキンググループでの検討内容の示し、新しい循環器看護の定義について提案した。</p> <p>発表者：岡田彩子、三浦英恵、<u>溝部昌子</u>、北村愛子、瀬戸奈津子、南川貴子、仲村直子、濱上亜希子</p>
<p>熟練透析看護師が透析治療の準備から終了までのプロセスにおいて実践している医療安全の取り組み</p>	共著	2019年11月	第22回日本腎不全看護学会 (於 札幌)	<p>透析医療を担う看護師10名を対象に、半構成的インタビューを実施し、逐語録を質的記述的に分析した。《患者個別の状態とフロア全体の状況認識》、《経験知に基づく臨床判断》《嚴重な体重管理と除水管理》《専門的な知識・技能・心構えによるシャント管理》《スタッフ一丸となって実践するチーム医療》《リーダーシップを発揮して行うスタッフ統制》など10カテゴリーが抽出され、透析医療における熟練看護師のコンピテンシーを示した。</p> <p>発表者：岩倉真由美、<u>溝部昌子</u></p>

2019年度 研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
【学会発表】 つづき 食文化ノートと看護英語 集録集の制作	単著	2019年11月	nGlobe研修アドバンス コース（於 千葉）	JSPS (A)「世界をリードするインバウンド医療展開に向けた看護国際化ガイドライン」(代表野地有子)における看護職を対象とした研修会において、外国につながりのある人たちへの看護ケアのツールとして、食文化ノート、看護英語集録集の政策に至った経緯、プロセスを報告したもの 発表者：溝部昌子
看護職の多文化対応能力 研修ベーシックコースの 開発と評価第1報 研修コ ース開発のプロセスと構 造	共著	2019年12月	第39回日本看護科学学 会学術集会（於 金沢）	看護職の多文化対応の困難を軽減し文化対応能力が向上する多文化対応能力研修プログラムの開発過程と、研修プログラムの概要を示した。2015年看護師を対象としたアンケート調査結果（4738件）より、外国人対応で困った42場面を抽出し、イラストを用いて「異文化との出会い42病院マップ」を開発した。これを用いた研修を受講した看護職の異文化への関心度に関わらず、マップの活用が効果的であった。研修プログラムは、看護師7494名のカフリー文化対応能力調査結果により3つの潜在特性に応じて、ベーシック、アドバンス、エキスパートの3段階とし、コミュニケーション演習や倫理事例演習を含むそれぞれ1日研修とし、日本語版CCCHSで評価する。 発表者：野地有子，野崎章子，溝部昌子，近藤麻理，小寺さやか，飯島佐知子
地域在住の女性高齢者における尿失禁の実態と支援の在り方	共著	2019年12月	第39回日本看護科学学 会学術集会（於 金沢）	地域在住の女性高齢者を対象として、King健康質問票日本語版を用いて尿失禁の実態について調査した。対象41名、平均年齢80歳について、尿漏れありは48.8%、後期高齢者では43.3%、後期高齢者の尿漏れ頻度は1週間に1回かそれ以下と回答とした人が65%で、尿漏れの量は少しとした人が84.2%であった。



2019年度 研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
<p>【学会発表 つづき】</p> <p>看護職の多文化対応能力育成を目的とした研修プログラム開発過程について</p>	共著	2019年12月	第4回国際臨床医学会学術集会（於 福岡）	<p>年齢が長ずるにしたがって尿失禁の頻度は上昇すると言われているが、今回対象となった市民センターや通所介護での活動に参加している高齢者については、そうとは言えなかった。</p> <p>発表者：吉原悦子，丸山泰子，金子由里，<u>溝部昌子</u></p> <p>看護職の多文化対応能力の育成を目的とした研修プログラムの開発過程において、大学教員の国際化、外国人患者対応に関する困りごと、文化能力評価スケールに基づいて教材、研修プログラムを構築したことを示した。</p> <p>発表者：<u>溝部昌子</u>、野地有子、大友英子、近藤麻理、小寺さやか、飯島佐知子、野崎章子、炭谷大輔、相原綾子</p>
<p>Study on Evaluating a Cultural Competency Training Program in Japan</p>	共著	2020年2月	The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science	<p>文化能力研修プログラムベーシックコースの実践報告とプログラム評価について示した。217名の受講者に対し、インバウンド医療提供、社会的背景と教育の必要性、外国人患者への看護ケア、コミュニケーション、倫理課題を含む研修を実施した。</p> <p>アンケート回答者167名の満足度は高かった。自由記載は、同様の課題の共有、振り返りの機会、外国人患者対応についての知識の習得、業務へのヒント、自施設での実施、アドバンスコースの要望の6つに分類された。</p> <p>Ariko Noji, Mari Kondo, Sayaka Kotera, Sachiko Iijima, <u>Akiko Mizobe</u>, Akiko Nosaki, Hikaru Matsuoka, Yoshiko Hamasaki, Daisuke Sumitani, Ayako Aihara</p>

2019年度 研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
<p>【学会発表 つづき】 Participatory approach in "a training program for enhancing nurses' capability of responding multicultural situations"</p>	共著	2020年2月	The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science	<p>多文化対応能力研修プログラム教材「異文化との出会い42病院マップ」英語版を用いて、看護職、看護学研究者がフォーカスグループディスカッションにより、異なる文化背景を有する患者への看護における課題解決法、その対処法に関する研究プログラムについて検討するインフォメーションエクステンションを企画した。</p> <p>Ariko Noji, Mari Kondo, Sayaka Kotera, Sachiko Iijima, <u>Akiko Mizobe</u>, Akiko Nosaki, Hikaru Matsuoka, Yoshiko Hamasaki, Daisuke Sumitani, Ayako Aihara</p>
<p>外国につながるのある人たちへの看護ケア －異文化との出会い 42 病院マップの開発と活用 第2報－</p>	共著	2020年3月	第10回日本看護評価学会 (於 東京)	<p>多文化対応能力研修プログラム教材「異文化との出会い42病院マップ」を活用した研修参加者に実施したアンケート調査の結果の内、受け入れるのが困難な文化や習慣、コミュニケーションの工夫、個人や組織の努力や期待について尋ねた自由記載を整理して示した。通訳者、表示、デバイスに関すること、マニュアルの整備や組織体制の整備、勉強会や事例検討のニーズが明らかとなった。</p> <p>発表者：相原綾子、野地有子、近藤麻理、小寺さやか、飯島佐知子、<u>溝部昌子</u></p>
<p>HCAHPS を用いた日本に滞在する外国人と日本人の日本の病院での入院経験の質の比較</p>	共著	2020年3月	第10回日本看護評価学会 (於 東京)	<p>米国で開発された病院サービスを評価するHCHAPSを用いて、日本に滞在する外国人の入院建研について調査し、日本人のそれと比較した。外国人63名、日本人60名の回答があった。コミュニケーションについて、日本人に比べて外国人、医師に比べて看護師、国際医療認証施設が非認証施設に比べて満足度が高いことが分かった。</p> <p>発表者：飯島佐知子、松岡光、野地有子、近藤麻理、小寺さやか、<u>溝部昌子</u></p>

## 外部資金（科学研究費補助金等）導入状況（本学共同研究費を含む）

## (1) 共同研究

研究題目	交付団体	研究者 ○代表者（）内は学外者	交付決定額 (単位：円)
「世界をリードするインバウンド医療展開に向けた看護国際化ガイドライン（17H01607）」	文部科学省科学研究費補助金 基盤（A）	代表：野地有子 （千葉大学） 研究分担者	分担研究者 50,000 円 (H29-33)

## 外部資金（科学研究費補助金等）導入状況（本学共同研究費を含む）

## (2) 個人研究

研究題目	交付団体	交付決定額 (単位：円)	備考
「外国につながりのある人たちへの看護における看護コミュニケーションの検討と看護英語集録集の制作」	西南女学院大学 附属医療福祉研究所研究助成金	研究代表者 283,000 円	

社 会 に お け る 活 動 等		
団体・委員会等の名称 (内 容)	役 職 名 等	任 期 期 間 等
千葉大学大学院看護学研究科附属看護 実践研究指導センター	共同研究員	2015年～1年毎に継続更新中 研究会議出席
	nGlobe 研修モデレーター、 講師	2019年7月、11月
日本血管看護研究会	代表世話人 学術集会主催 学術集会プログラム委員	2015年～ 2015年～毎年 2015年～毎年
西南女学院大学 認定看護管理者教育課程	教育運営委員 検討委員	2018年度より 開講式、閉講式出席 運営会議
西南女学院大学認定看護管理者コース 「人材育成」	セカンドレベル講師	2019年10月
西南女学院大学シニアサマーカレッジ 「足の痛いのがさようなら-足の病気とフ ットケア-」	講師	2019年8月

学 内 に お け る 活 動 等 (役職、委員、学生支援など)
国際交流委員会委員
国家試験対策担当
西南女学院大学紀要査読委員